

氏名（本籍）	宗澤 紀子		
学位の種類	博士（看護科学）		
学位記番号	博甲第	9901	号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	胃がん術後患者の自己効力感が QOL に与える影響		
主査	筑波大学教授	博士(心身障害学)	森 千鶴
副査	筑波大学准教授	博士(保健学)	柴山 大賀
副査	筑波大学助教	博士(看護学)	杉本 敬子
副査	筑波大学助教	博士(ヒューマン・ケア科学)	伊藤 智子

論文の内容の要旨

宗澤紀子氏の博士学位論文は、胃がん術後患者の自己効力感が QOL に与える影響を縦断的に検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

著者は胃がん術後の機能障害が、患者の身体的側面、社会的側面、精神的側面に大きく影響しているが、機能障害を抱えながらも日常生活を工夫して対処し、自己管理することの重要性を述べている。しかし、胃がんの患者は、術後 1 ヶ月は機能障害による身体症状の出現を体験し、今後の見通しを立てることが困難な時期であると指摘し、この時期に適切な看護支援を行うことができれば、患者の QOL は向上できると考え、本研究を行う動機となっている。また、胃がん術後患者の自己管理について、自己効力感の高い患者は、低い患者よりも QOL が良好であることを、著者は先行研究から明らかにしている。本研究における QOL は、胃がん術後患者の日常生活に影響を及ぼす身体的側面、社会・家族的側面、精神的側面、機能的側面の 4 つの領域を多次的に患者自身がとらえた日常生活における認識と定義し、また自己効力感とは、日常生活に適応するために、感情を調整することや日常生活行動をうまく行うことができると認識することと著者は定義している。著者は術後 1 ヶ月後の自己効力感が高い患者は、退院後の日常生活の中で自己管理行動を取ることを予測し、さらに自己管理が効果的に行われ、日常生活が調整できていると認識することで、術後 6 ヶ月の QOL が回復するのではないかと仮説を立てている。そこで本研究の目的を胃がん術後患者の 1 ヶ月と 6 ヶ月の QOL に関連する自己効力感や他の要因を明らかにすることとしている。

【方法】

著者は 3 カ所の地域のがん診療拠点病院指定を受けている総合病院で、胃がんの手術を受けた患者 110 名を対象としている。調査内容は、胃がん術後患者用に米国の Cella が開発した FACT-G version4 (General Measure of Functional Assessment of Cancer Therapy scale の日本語版) と、がん患者の一般的自己効力感を測定するがん患者用自己効力感尺度を用いて自記式アンケート調査を行っている。また、この他に術式、治療状況や症状、体重などに関する情報を診療録から得ている。著者は、これらの調査について胃がんの手術後に対象者に説明を行ったうえで調査用紙を手渡し、1 ヶ月後に郵送で回答を得ている。また 1 ヶ月後に回答のあった調査協力者に対し、6 ヶ月後にあたる時期に調査用紙を配布し、回答を郵送で得ている。

【結果】

著者が、同意を得て調査票を配布できた 91 名の対象者のうち、術後 1 ヶ月と 6 ヶ月に調査の協力が得られ、有効な回答が得られた 71 名を分析対象としている。対象者の年齢は 69.14 ± 8.82 歳であり、男性 50 名、女性 21 名であった。術式は幽門側胃切除術 53 名 (74.6%) 胃全摘術 15 名 (21.1%)、噴門側胃切除術 3 名 (4.2%) であった。世帯状況では、独居が 6 名で、同居者がいる者は 65 名であった。

尺度の信頼性を示す α 係数は、術後 1 ヶ月の QOL の尺度では $\alpha = .85$ 、自己効力感の感情統制効力感 $\alpha = .85$ 、日常生活効力感 $\alpha = .91$ 、術後 6 ヶ月の QOL の尺度 $\alpha = .82$ 、自己効力感の感情統制効力感 $\alpha = .79$ 、日常生活効力感 $\alpha = .86$ であり、著者は本研究における信頼性を確認している。

術後 1 ヶ月の QOL は、術後 1 ヶ月の自己効力感の感情統制効力感 ($r = .51$) と、日常生活効力感 ($r = .53$) と中等度の正の相関が示されたことを明らかにしている。また、食事関連症状 ($r = -.32$)、腹部膨満感症状 ($r = -.30$)、腹部過敏症状 ($r = -.30$)、頸部胸部症状 ($r = -.43$)、年齢 ($r = -.30$) との間に負の相関が認められたことを著者は明らかにしている。

また、術後 6 ヶ月の QOL は、術後 6 ヶ月の自己効力感の感情統制効力感 ($r = .35$) と弱い相関であったが、日常生活効力感 ($r = .56$) と中程度の相関であったことを明らかにしている。また腹部膨満感症状 ($r = -.32$)、頸部胸部症状 ($r = -.39$)、年齢 ($r = -.33$) との間に弱い相関が認められたと著者は明らかにしている。

さらに著者はステップワイズ法による重回帰分析で術後 6 ヶ月の QOL に影響する要因を分析している。その結果著者は、1 ヶ月 ($\beta = .32$) と 6 ヶ月 ($\beta = .29$) の自己効力感の日常生活効力感と世帯状況の同居 ($\beta = .26$) が正の影響、また 6 ヶ月の頸部胸部症状 ($\beta = -.23$) が負の影響であることを明らかにした ($F = 15.67$, 自由度調整済み決定係数 $R^2 = .49$)。

【考察】

著者は本研究の結果から、胃がん術後患者の自己管理を継続する上で、術後 1 ヶ月の日常生活効力感が重要であることについて、自己効力感の理論を用いて考察している。著者は胃がん患者が、術後の症状を管理しながら、日常生活を送るためには、病気と治療を管理するという自信を高めることが、QOL を向上させることにつながると述べている。またその QOL を高めるためには、患者ができていないところに着目するのではなく、患者自身が積極的に取り組んでいるところや、できていることに着目し、自信を高めるように援助することが重要となると著者は述べている。さらに患者の体験をいかしながら、術後 1 ヶ月の日常生活効力感を高めていくことができれば、患者の QOL は高まり、長期にわたって自己管理を継続することができるとの示唆を得ている。

審査の結果の要旨

(批評)

著者は胃がん術後患者の自己効力感に着目し、6 ヶ月後の QOL に影響を及ぼす要因を縦断的に検討し、患者のできないところを補うよりも、患者自身が取り組んでいることやできていることを認め、自信を持てるように支援することによって患者の QOL が高まり、長期にわたって自己管理が可能になるという結果を導き、今後の胃がん術後患者の看護に有用な示唆を提示した。

令和 3 年 1 月 29 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士 (看護科学) の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。